

2002年
4月発行

no. 54

特集

高校時代に 韓国朝鮮語を学ぶ

高校教師たちのネットワークがめざすもの

韓国朝鮮語教育に携わる
高校教員を中心とする
ゆるやかな全国組織として
高等学校韓国朝鮮語教育
ネットワークが設立されてから
3年が経とうとしている。
この間に参加者が増え、
その活動は設立時の予想を
はるかに超える勢いで
多角化している。
ネットワークの試みを
一つの運動として捉え、
その活動の基盤と
中心軸を再確認してみた。



シリーズ

ことばは楽しい⑬ p.8
ハンガリー語

見る聞く考えるやってみる授業⑬ p.10
作ることで知る・メディア・リテラシー～現代文「情報社会と
人間」の実践～

素顔の高校生⑩ p.16
笑えることってすごく幸せなことなんだよ。

TJFの事業 p.12

「第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト」入賞作品
決定

「であい」ホームページ毎月更新中!
<http://www.tjf.or.jp/deai/>

2001年度第2回通常理事会・評議員会報告

事業報告(2002年1・2・3月)

韓国朝鮮語の授業を支える 高校教師たちの運動

高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(以下、「ネットワーク」と略す)が設立されたのは1999年、第2回高等学校韓国語教師研修会の会期中のことであった。前年に全国の高校教員が集まったが、そのときは韓国朝鮮語^{★注}(以下、「韓語」と略す)教育に携わる教員が一堂に会すること自体に意味があった。

ブロック活動の総和としてのネットワーク

ネットワークは、全国の高等学校の約3%で実施されている韓語教育(学習者数は高校生の約0.1%)を拡充すべきだと考える高等学校と大学教育の関係者が立ち上げた組織である。韓語の授業内容は地域と学校によってかなり異なっている。ネットワークが当初から地域ブロック制をとったのはそのためである(全国を東、西、南の三つのブロックに分け、地域特性を生かした活動ができるようにした。将来的には、さらに細分化されることもあり得る)。全国組織というより、三つの地域組織のゆるやかな連合体であり、各ブロックの活動の総和がネットワークなのである。

現状で「できることから」

ネットワークに参集した人々に共通する思いは何か。日本の学校教育において、他の外国語にくらべて韓語は正当に扱われていないという憤懣であり、韓語がもっと広く学校教育のなかで教えらるべきだという主張である。言語的、歴史的に日本語と最も近い関係にある韓語を学ぶことによって、隣国ならびに日本語と日本に対する理解を深めるべきだという訴えである。この主張は、ネットワークの活動を当初から一つの運動にしないではおかなかった。

高等学校の韓語教育を支えている者の多くは非常勤講師や韓語以外の科目を教える教員であり、韓語の教員免許を持つ者は少ない。そんな現状を少しでも変えたい、変えなければならぬ——ネットワークの

働きかけがきっかけとなって、昨年からは天理大学と神田外語大学で韓語の教員免許を取得するための集中講座が開講されている。

ネットワークの運動は、東日本ブロックによる『高校生のための交流語彙集』試験本の発行、西日本ブロックによる高校生向けの初めての教科書『好きやねんハングル』試用版の発行などの成果に見ることができる。

2002年度に予定しているソウルでの教師研修プログラムへの企画段階からの参加など、その運動は日本にとどまらない。ネットワークに参加している個人やグループがこれらの活動に参画し、ネットワークが後押しをしている。ネットワークと個人との間に、そんな関係がしだいに定着した。

教師と高校生それぞれの働きかけ

ネットワークに参加しているメンバーの多くに見られる特徴の一つは、高校生と一緒に学ぼうとする姿勢である。本来、教育者が持つべき最も大事な姿勢であろう。高校生と学びながら学校や周囲の人々に働きかけていく教師たちの集まりなので、運動がこのような様相を帯びるのは必然だった。

ネットワークに後押しされながら、教師と生徒がそれぞれのやり方で周囲に働きかけようとしている。今回の特集に含めた、高校の韓語教育にとって最大の懸案の一つだった教科書(試用版)を完成させた西日本ブロックの活動、学校に働きかけて「ハングル基礎」を開講した西澤さん、十数年前の韓国の高校との交流事業を伝える馬場さん、初めて韓国を訪ねた武松さんなど、教師と高校生それぞれの思いのなかにネットワークの運動が息づいている。

★注：ハングル、韓国語、朝鮮語などと呼ばれる隣国のことばの総称として「韓国朝鮮語」を用い、略して「韓語」とした。

■ TJFの韓国朝鮮語教育の関連事業(ネットワークの活動を中心に)：1997-2002

1997年-	高等学校における韓国朝鮮語教育の調査	2001年11月	高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク第1回全国交流会開催 [大阪]
1998年6月	調査の中間報告書発行	12月	高校生の韓国招聘プログラム(韓国国際教育振興院主催)に企画段階から参加、東日本ブロック中心 [ソウル]
8月	第1回高等学校韓国語教師研修会(韓国文化院主催)開催 [東京]	2002年3月	第2回日韓青少年交流ワークショップ「韓国語でノジマ」(日韓文化交流基金主催)に参加 [神奈川]
1999年6月	調査報告書「日本の高等学校における韓国朝鮮語教育」発行	4月	『好きやねんハングル』試用版発行(西日本ブロック)
8月	第2回高等学校韓国語教師研修会(韓国文化院、TJF共催)開催 [東京] 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク設立(事務局TJF内)	7-8月	天理大学と神田外語大学の講座、第2年度開講(天理大学は2002年度で終了、神田外語大学は2003年度まで)
2000年3月	朝鮮語・韓国語の教員免許プロジェクト発足	7月	高校生の韓国招聘プログラム(韓国国際教育振興院主催)に企画段階から参加、西日本・南日本ブロック中心 [ソウル]
8月	第3回高等学校韓国語教師研修会(韓国文化院、TJF共催)開催 [東京]	8月	高等学校韓国語教師研修プログラム(韓国国際交流財団主催)に企画段階から参加 [ソウル]
9-10月	天理大学と神田外語大学に朝鮮語・韓国語の教員免許取得の講座開講を要望	11月	高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク第2回全国研修会開催 [鹿児島]
2001年3月	『高校生のための交流語彙集』試験本発行(東日本ブロック) 第1回日韓青少年交流ワークショップ「韓国語でノジマ」(日韓文化交流基金主催)に企画段階から参加 [神奈川]		
7-8月	天理大学と神田外語大学の講座、初年度スタート [奈良、東京]		



『好きやねんハングル』 ——「教科書づくり」のはるかな道のり

大阪府立阪南高等学校 任喜久子(イムヒグジャ)



高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク西日本ブロックの活動の一つが「学習のめやす」づくりとそれに依拠した教科書の作成である。「学習のめやす」活動は思考を集中させ、多くの時間を要する地道で見えにくい活動である。

「学習のめやす」の作成:1999-2000年

ブロックごとに活動を開始した直後、西日本では「学習のめやす」チームが発足した。メンバーは高校教員の方政雄(バンジョンウン)、左美和子(チャーミファジャ)、康龍子(カンヨンジャ)、梁千賀子(ヤンチョナジャ)、長谷川由起子(九州産業大学の専任講師)と任(イム)の6名。大阪のALT(語学指導助手)、金智賢(キムチヒョン)にも協力を得ている。

まったく何もないところからの「学習のめやす」作成は、予想以上の試行錯誤を強いられた。アンケートを取って生徒の学習状況や学習項目の定着状況等を調べ、自分たちの長年の経験を出し合っ基本路線を構築していったが、それだけでもかなりの労力と時間を要した。どの程度のものをどの段階で入れるべきかという議論を長い間続け、高校の韓国朝鮮語授業の多くを占める2・4・6単位の学習時間にあわせて、語彙と文法項目を選定していった。

2000年に「学習のめやす」の語彙と文法項目について報告したとき、それを実際にどのように教えるのか具体的な内容が伝わりにくいという指摘を受けた。その後、文法項目・語彙ともに再検討を加え、高校生向けの具体的な教材、教科書の作成作業に取りかかった。

教科書づくりに着手:2000-2001年

まず、入門段階のものとして2単位(1年間で50時間、4単位の学校なら半年間の授業)に相当する内容を設定し、前半「文字と発音」、後半「会話」の2部構成にした。韓国朝鮮語の学習で最初の難関となるハングル(文字)の学習をどの時期に入れるか。近年オーラルコミュニケーションがもてはやされているだけに、かなりの議論となったが、初期段階での文字導入は避けられないと判断した。

「会話」の部は韓国朝鮮語がより身近なものになるよう、登場人物を日・韓・在日の高校生4人とした。大まかなキャラクターを決め、後々

さまざまな会話の場面で登場人物に親しみを持てるように工夫した。「基本会話」は、高校生なら誰でも口ずさめる簡潔なフレーズに絞り、ペアワークが可能なスタイルを取った。余裕のある生徒向けに「応用会話」も掲載した。

ネットワークの後押し

2001年の全国研修会以降、教科書づくりに絞ったメーリングリストを立ち上げ、メンバー間のやり取りに生かすとともに、教科書づくりの進捗状況を公開して各ブロックのメンバーから貴重な意見を寄せてもらっている。今風のイラストは現役の大学生である山下蓉子さん(南日本ブロックの山下敏裕さんの「愛娘」)の協力を得た。

白帝社の協力を得てこの4月に試用版を発行する。1年間の試用を経て利用者から意見を寄せてもらい、改訂を加えて2003年春の出版を計画している。全国のネットワークのメンバーによる適切なアドバイスに常々感謝しているが、試用版に対してネットワーク内外からの辛口の批評を期待している。

「教科書づくり」のはるかな道のり:2002年-

チームの会合は現在、大阪府立阪南高校で行っている。初期は鶴橋駅から徒歩5分、猪飼野のど真ん中にある「ジョアハングル研究所」で行っていた。いつも誰かがキンパやチジミ、ケーキ等を持参してくる。メンバーのほとんどが在日韓国朝鮮人の2世・3世であり、時には延々と在日の話で熱くて濃い議論になった。

テキストの内容を日本と韓国だけに限定せず、在日の存在を反映したいという「熱望」もそんな議論からだ。入門段階では構成上難しかったが、登場人物に在日を含め、コラムの中に反映させた。

チームの会合は常に発見と収穫の場であり、密度の濃い時間だった。会合の頻度が月1回から2回に増えたときは、みんな目いっぱいだったと思う。でも、ワークシートやゲーム、単語カードの作成、指導マニュアル・吹き込みテープの作成、テキストⅠの改定とⅡ・Ⅲへの着手等々、残された仕事は多い。試用版の発刊を目の前にして、「教科書づくり」のはるかな道のりに思いを馳せている。



190人の高校生が学んだ 「ハングル基礎」の試み



長野県立松本蟻ヶ崎高等学校* 西澤俊幸

「地元の高校で韓国朝鮮語を教える」——そんなことが実現する日が本当に来るのだろうか。半信半疑のまま最初の授業に臨んだ日のことが、つい昨日のこのように思える。

自分がいる間だけでも……

松本蟻ヶ崎高校でハングル基礎の授業を3年生の選択科目として開講したのは1996年4月のことである。隣国の言語を学ぶことに意義を見だし、その前年から周囲に働きかけながら開講に漕ぎ着けた「個人開拓型」の講座であった(『通信』No. 48, p.2)。

蟻ヶ崎はおろか、長野県内では前例のない試みである。身近なところに理解者がいてくれた一方で、反対を唱える者も陰にいたと聞く。当然のことながら「担当者が異動したらどうするのか」という声もあった。「担当者がいる間だけでもやらせてくれ」——ともかく開講したいという思いだけで突き進んだのである。

他にも問題はあった。教育課程表にハングル基礎を入れることは実現したが、果たして開講に足るだけの生徒が集まってくれるだろうか。生徒が集まってくれなければ開講はできない。しかし、この点は当時2年生の英語を担当していたことが幸いした。

次年度の科目選択の時期に、英語の授業を使って「こんなに面白いことばがあるんだよ」と「営業」する機会があったのである。「韓国に友だちがいる」「英語以外の外国語をやってみたいと思っていた」等、動機は様々だが、予想を大幅に超える生徒が集まってくれた。

共通の課題を解決していく仲間たち

やっとのことで開講を迎えた。ところが、もう一つ大きな問題があった。1年間の授業をどう展開していったらよいのかというシラバスとテキストの問題である。何をどこまでどのように教えたらいのかという指針はどこにも存在しないし、大学生用の初級外国語のテキストがいくつか出ていたとはいえ、高校生を対象としたものは皆無であった。最初の頃はシラバスはおろか一時間一時間の授業運営も行き当たりばったりで、全くの手探り状態であった。

そのような中で二つの転機が訪れた。一つめは98年に第1回高等

学校韓国語教師研修会が開催されたこと、99年夏に高等学校韓国朝鮮語教育ネットワークを設立したことだ。仲間たちと共有できる時間と空間の中から刺激や授業展開のヒントを得たり、共通の課題を解決していくためのつながりを得ることができた。

二つめは韓国の高校と交流が始まり、手紙やビデオレターをやり取りしたり、共通テーマでの合同授業を行ったりと交流を深めながら(『通信』No. 41, p.6)、2001年3月には神奈川・大阪の公立高校の生徒とともに直接訪問を実現したことである。

ハングル授業のある日が楽しみ

ことばを学んだ先に一体どんな素晴らしい世界が開けてくるのか、それを生徒たちに体験させたい。試行錯誤を繰り返しながらも一定の成果を上げることができると確信した。

開講から何年か経つうちに、生徒たちから「クラブの先輩が授業で習った簡単なことばを教えてくれたり、ハングルの授業のある日の朝なんか“楽しみ”と言っていたので興味をもった」という声が聞かれるようになり、この授業が生徒たちの間に定着したことを実感した。

2001年度の選択者の一人は、「今まで学習したことのない外国語を学ぶことで、その文化を認められるようになった。今自分が勉強していることばを毎日話して実際に生活している人がたくさんいるんだから。なんかそれってすごいことだと思う」と語っている。

しかし、異動とともに、幕を下ろさざるを得ない日が来た。学校という組織の中に、「組織として」この言語の教育を定着させることができなかったからである。授業の実践がマスコミにも取り上げられ、県や管理職はハングル基礎が学校の「特色」だと言ってくれたが、所詮は「個人開拓型」の講座であったことを痛感せざるを得ない。

この6年間に蟻ヶ崎でハングル基礎を選択した生徒たちの数は190人にのぼる。彼らが高校時代の一時期にこの言語を学んだことにどんな意味があったのだろうか。生徒たちは何を学んでくれたのだろうか。彼らの声に真摯に耳を傾け、高校時代に韓国朝鮮語を学ぶ意味を検証していく作業を続けていきたいと思う。

*4月より長野県塩尻志学館高等学校に勤務



何千何万という 熱い眼差し

熊本県立東稜高等学校* 馬場純二



私が以前勤務していた菊池農業高校は、韓国の農業高校と交流していた。あれから14年が経った。交流事業を通じて培われた熱い眼差しは確実に伝えられている。私たちがポギルと呼んだ韓国の西江(ソガン)大学に学ぶ学生が、この春ホームステイしたときにそれを実感した。彼は、将来KBS(韓国放送公社)に入社し、日本と韓国の文化比較の番組を制作したいと考えている。

兵役を前にして丸坊主になったポギルは、ほとんど日本語を話すことができなかったが、日本の若者と会って話したいというので、熊本学園大学で韓国語を学ぶ安達知子さんに私から連絡をとり、若者スポットを案内してもらうことにした。知子さんは高校時代に熊本中央女子高校で韓国語を学び、現在は大学で学んでいる。「ことばかんなくても面白いよ」と、大学の友達も呼び集め、食事やカラオケを一緒に楽しむうち、いつの間にか日本語・英語・中国語・韓国語ごちゃ混ぜで、お互いの国の文化や歴史を話し合ったという。

韓国の学生の日本イメージ

……ポギルは小学校の時から、歴史の授業などで、「日本人は鬼だ。日本人は人間ではない。日本人を信用してはならない」という教育を受け、ずーっと日本に不信感を抱いていたそうです。彼と同世代の友達もほとんどがそう思っているとのことでした。

日本人は感情を表に現さず、「心にナイフを持っている」という表現をよく使うそうです。ポギルから「日本の学生はどのような歴史認識もっているのか」と聞かれたとき、「日本の学生のほとんどは韓国の学生に比べてそのことに関して知識も乏しく、韓国の学生ほど興味を持っていない」と話しました。

それはもちろん国の違いでもあるし、教育の違いであり仕方ないことだけど、私たち日本の学生ももっと興味を持って多くを学ぶべきだと話し合いました。大人と大人の話し合いだとなつて感情的になつたりするけれど、若い世代だとお互いに心を開いて素直な気持ちで話し合える。そこにいたみんながそう感じました。

一番嬉しかったのは、日本人と韓国人がこのようなことに関して真剣に話し合えることでした。ポギルも「日本の学生の考えや意見を聞

いて胸がスーッと軽くなった」と喜んでいました。また、「日本に来て、日本人の良いところがたくさん見えた。みんな親切だった。韓国人が日本人に対して持っている印象とはまったく違った。また日本の学生とディスカッションしたい。今日のことを早く友達や家族に伝えたい」と嬉しそうに話してくれました……(知子さんの手記から)

彼ら彼女らのごちゃ混ぜのことばの中に「ポギルの胸をスーッと軽くした」何かがかもっていたのだろう。その場に居合わせたすべての若者が、ことばの壁を越えて「お互いに心を開いて素直な気持ちで話し合える」喜びを共有したのである。この一体感こそが、生の手触り感のあるコミュニケーションを成立させたのだ。

人こそが韓国語学習の主役

1980年代の終わりに、菊池農業高校と韓国の高校との交流は、生の一人の韓国人と、生の一人の日本人との意気投合から生まれた。お互いにお互いを認め合おうとする一人の存在——その後ろに、海を越えて何千何万という熱い眼差しがあるという思い、その熱い眼差しにうたれて交流は始まり、韓国全土に広がっていった。

「何のために学ぶのか」——“ことばを学ぶ”というとき、その向こう側に何があったのだろうか。国際理解教育、人権教育……さまざまなオブラートにぐるまれながらも、やはり知識偏重の受験教育が最優先される現在の高校教育の中であって、人と人を繋ぐ“ことば”さえも合理的選別の対象にされ、英米語こそが価値あるものとして認識されていく。その“価値”とは、いったい何なのだろうか。知子さんの手記の中に、答えは内包されている。

常に相手が見える位置で学び合い、高め合い、励まし合う、心の眼差しを自ら開く営み。お互いに泣き、笑い、共に肩を叩き合う。“人”こそが、この韓国語教育、いや韓国語“学習”の主役なのだ。生の人の温もりと手触り感がここにはある。「何のために学ぶのか」“ために”ではない、楽しいから学ぶのだ。人が好きだから、見詰め合う眼差しが好きだから学ぶのである。ネットワークに集う我々も、そして生徒たちも、出会いの熱に冒されている。

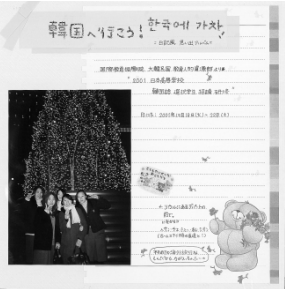
*4月より熊本県立図書館に勤務

韓国へ行こう!

～日記風思い出アルバム

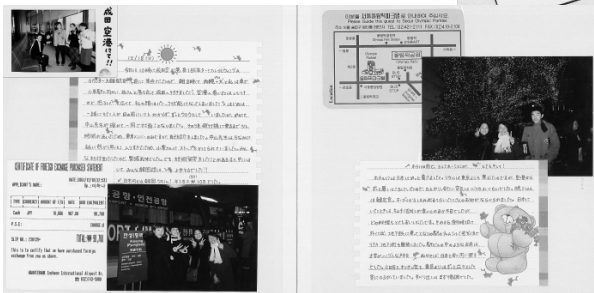
武松千尋

中央大学杉並高等学校3年
(プログラム参加当時)



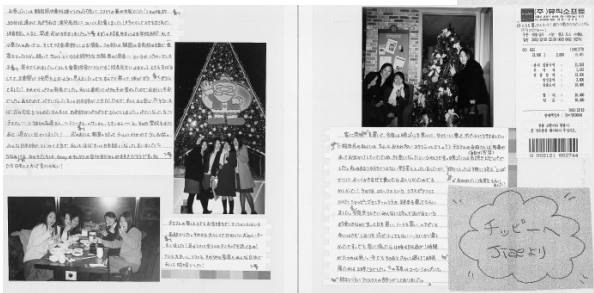
「韓国語を学んで韓国に行こう」 プログラムに参加した 高校生の思い出アルバム

とてもたがいでつな
ホームステイのおともたち



2 成田空港から(ソウル)仁川空港へ

3 ホテルの前、イルミネーションが
とてもキレイ



6 ペアになったチェさんと
彼女の友だちと

7 CDを買ったレシート
ハングルだらけ



8 ホームステイの友だちと
漢楽(ハニョン) 外国語高校で

9 利川(イチョン)で
陶器づくりに挑戦(写真上)



10 色彩の華やかな王様のお城:景福宮

11 貞洞劇場で伝統芸能を鑑賞

最もおそれていた
ホームステイの日

12/19(水)
今日は私の最もおそれていた、ホームステイの日でした。
言葉もわからないのに仲よくできるのでしょうか? 身月様決まらぬ
…… 日本時間にはまだ人と夜更け、滞りなくすまんだが、気がなれたこの日は
が昇るのがとても遅いということでした。日本と韓国の間に、時差がないことにも
驚きました。太陽は、私たちが国際教育振興院へ出て出発したときと姿を
見せていました。……午前中の前半の韓国語の授業は残念ながら、ちんぷんかんぷんでした。
先生はひまひ、指名して文章を読ませました。《今日の予定》

12月 19日(水)	朝食(バキング式)
07:00~08:00	ホテル 出発、国際教育振興院 到着
08:00~09:30	歓迎式、日程案内、国際教育振興院 紹介
09:40~10:30	韓国語 特講
10:40~11:30	ソウル 韓国歴史 特講
11:40~12:40	韓国文化体験
12:40~13:40	昼食(中華料理)
13:40~14:40	国際教育振興院 出発、学校 到着
14:40~17:30	韓米外国語高等学校 訪問
17:30~	ホームステイ(引率団 除外)

…… 先生の授業は、興味深かったです……
ちなみに授業は全て日本語でした……



興味深かった
(日韓を比較した)
歴史の授業

日記から

12月18日

- ① 初めての海外旅行なもんだから、力が入っちゃった……
- ② ……空港へ着いたはいいけれど、恐ろしく広くて私の頭はパニック状態になってしまいました。はじめは一緒に行く人が目の前にいてもわからず、ずっとウロウロしていました……
- ③ ……夜9時くらいに外に出、地下鉄に乗って隣の駅のチャムシルまで行き、地下街を散策しました。駅ビルの中のようなお店は文字がハングルなん所をゆめかせば、日本と全く同じようでした。三日月もオリオン座も東京よりはずっと広々とした空にひろがっていました……

12月19日

- ④ ……今日は私の最もおそれていたホームステイの日でした。言葉もわからないのに仲よくできるのでしょうか? ……一つ気になったのは、日が昇るのがとても遅いということでした。日本と韓国の間には時差がないことにも驚きましたが、太陽は、私たちが国際教育振興院へむけて出発したとき、やっとな姿を見せていました……韓国語の授業は残念ながらちんぷんかんぷんでした。先生はひまひに指名して文章を読ませたので、当たりはしないかとドキ2しました。角度的の違目から見た歴史の授業は興味深かったです。ちなみに授業は全て日本語でした。
- ⑥ ……サムル(ノリ)という伝統的な太鼓等の演奏……というか、パフォーマンスを見せてくれました。とてもすばらしくて大音響が快感を呼ぶように思えました……それからペアの発表でした。私は直前にペアの子が変わったので、余計に不安でした。あらためてペアになった子は日本語が上手だったので、私も一安心。
- ⑦ ……家に荷物を置いて、今度は晩ご飯を食べに、タクシーに乗ってデパートに行きました(一般庶民の私にはちょっとおそれ多いスケジュールでしょう?)……晩ご飯は石焼きビビンバでした。私のあまり好きでない野菜も入っていましたが、「郷に入れば郷に従え」とばかりに、よくかき混ぜて食べたなら美味しかったので嬉しかった。

ネットワークが企画段階から関わっている事業のうち、「韓国語でノジマ」(日韓文化交流基金主催、2001年と2002年の3月に実施)と「韓国語を学んで韓国に行こう」(韓国国際教育振興院主催、2001年12月に試行プログラムを実施、来年から本格的に実施する予定)の二つの事業は韓国朝鮮語を学ぶ高校生が参加するもので、いずれも日本と韓国の高校生どうしの交流をはかるプログラムです。高校生が自らの感性と観察眼を持って隣国の文化に触れるとき、彼らのなかで何かが大きく変化しているはず。武松さんが作った写真・チケット・レシート・ちらし・日記風の文章などをレイアウトしたアルバムが、その一端を伝えてくれます。



5

12月20日

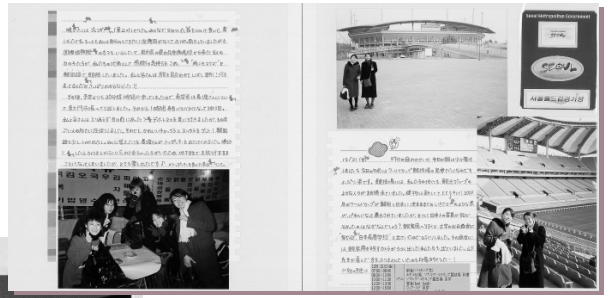
8 ……すぐにお別れになってしまい、ちょっと悲しい気分に。本当に身にあるほどの歓待でした。
 12 (夜、東大門市場へ)1時間各自バラバラになって徘徊……ものすごい人の多さに圧倒されました。それでもかわいいチョッカラとスッカラをゲット！ 韓国語も少ししゃべれたし……

12月21日

15(サッカー競技場に行った後)……お昼ごはん見ての通りピザでした。……ファーストフードは久々でしたが、カルチャーショックは何気ないありました。テーブルにつくと、サラダ用のお皿がテーブル1つにつき1つで、ピザを載せるお皿が人数分おいてありました。サラダは代表者がセルフサービスのカウンターで取ってくるらしい。そしてコップもすでに人数分おいてあり、ウェイトレスさんがコーラをピッチャーになみなみと入れてきて、ドンッおきました。炭酸もきれていた……それからピザが運ばれてきましたが、デカイ!! サイゼリヤのピザの1.5倍以上と見えました。そういえば気づいてみると、テーブルにセッティングされてあるタバスコや粉チーズの入れものもデカイ! ……韓国人で肥満の人はついそ見なかったのに、アメリカ人なみの量を食べられるんでしょうか?
 16 (ロッテワールドの後、自由行動)晩ごはんはちょっと横道に入った怖そうなお店に入りましたが、かえって人情味があって◎でした。

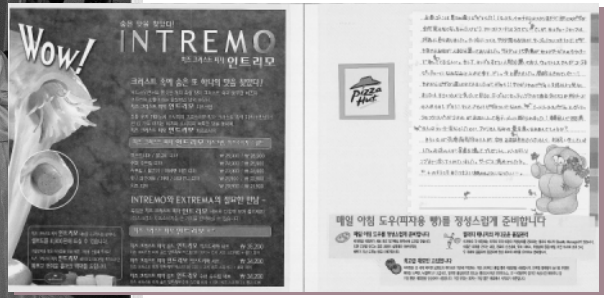
12月22日

19(帰りの機内で)……富士山が見えると、日本なんだなって、しみじみ実感がわいてホットしました。
 20 ……この4泊5日間は私にとって生涯二度と得難い経験になりました。何を一番思ったかといえば、私が全然韓国語をしゃべれなくて悔しい!ということでした。今度行くときまでにはもっと上達しなければならぬと固く決心しています!!



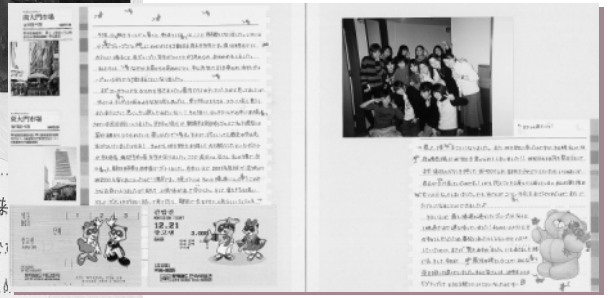
12 東大門市場のトッポッキを食べた屋台

ワールドカップ競技場で 13



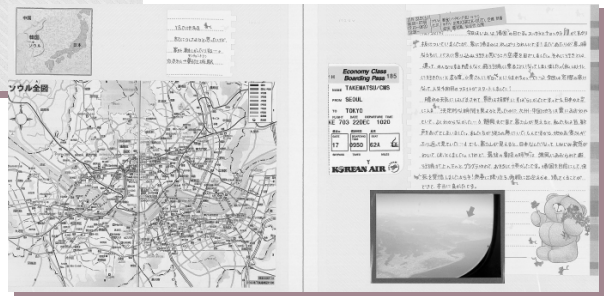
14 ハングルで書かれたチラシ

このチラシを読めるようになりたい 15



16 ロッテワールドのチケット

ホテルで 17
 参加したみんなと一緒に



18 ソウルの地図: 行った場所はどこかな

帰りの機内で富士山を見て、 19
 みんなで歓声

新参加者名簿

名前	年齢	性別	所属
武松 千尋	21	女	東京都江戸川区在住
TAKEMATSU Chihiro	21	女	東京都江戸川区在住

武松 千尋
TAKEMATSU Chihiro

20 参加者名簿とわたしの名札



武松千尋(たけまつちひろ)

東京都江戸川区在住。中央大学杉並高等学校をこの3月に卒業。……近くて近すぎて、外国という実感があまりありませんでした。それが隣国なのかな? でも新しくして美しい。そしてどこからでも山が見えて、ソウルはとても楽しかったです。またチェさんたちに会いに行かなくちゃ!

ことばは 楽しい 15

世界にはいろいろなことばがあり
それを使って生活している人たちがいます。
数多くの魅力あふれることばを育んだ
風土や文化を紹介しながら
ことばを学ぶ楽しさを伝えていきます。

教育関係者の方々に：
高校生をはじめ若い人たちに
広くこのシリーズを
読んでもらいたいと思います。
ぜひ教室等に掲示してください。

ハンガリー語

大杉千恵子

Szia! (シア) こんにちは、やあ、オスツ、さよなら、バイバイ

大杉千恵子(おおすぎ・ちえこ)
名古屋大学国際開発研究科
国際コミュニケーション専攻博士課程後期。1993年調査活動で初めて訪問して以来ハンガリーにひかれ、現在ハンガリーにおける日本語教育を調査研究中。97年から4年間ブダペストに在住。現在は日本とハンガリーの間を行き来している。

(上)ハンガリーは、カトリックの国。立派な教会が、街のいたるところにある。(下)彩りのない枯木が目立つ冬でも、花屋さんのスタンドには色彩豊かな花が並んでいる。

ハンガリー語はもともとあまりなじみのないことばの上に、音節のたくさん連なる長いことばが多く、とっつきにくい印象を与えてしまう場合があります。長くて舌をかみそうなのが、正式な「さようなら」ということば、Viszontlatasra(ヴィソントラータツシュラ)です。初めてこのことばを聞いたときは、あまりにも長いうえに、日本語にないVの音や、また判別困難なRとLの音が入っていることから、ハンガリー語とは難しいものだ、絶望的になったものでした。

日本語の「こんにちは」にあたることばは「Jó napot kívánok! (ヨーナポットキヴァーノク)」と言います。「おはようございます」は「Jó reggelt kívánok!(ヨレグゲルトキヴァーノク)」、「こんばんは」は「Jó estét kívánok!(ヨエシュテートキヴァーノク)」、「おやすみなさい」は「Jó éjszakát kívánok!(ヨエイサカートキヴァーノク)」。

みんな、この長くて難しい挨拶ことばをまず一生懸命練習するのです。外国生活の第一歩は何といっても挨拶ですから。

例外的に短くて簡単なのが、挨拶ことばの「Szia! (シア)」。「シア」は「Szervusz!(セルヴス)」、「こんにちは」という挨拶ことばの「砕けた形」です。出会ったときと、別れるときの両方に使うことができるうえに、一日中どの時間帯にも使えます。主に、友だち同士など親しい間柄で使いますが、相手の年齢や性別にかかわらず、かなり親しい気持ちを

表すことばでもあります。ただ、油断ならないのは複数の相手に言う場合は「Sziaosztok!(シヤストック)」「Szervusztok!(セルヴストック)」と語尾が変化するのを忘れてはなりません。

目上の人に失礼に当たらないようにと、いつも「ちゃんとしたバージョン」ばかり使うのは「日本の感覚」だったのでしょうか。私が新しいアパートに引っ越してしばらくたったとき、廊下でばったり恰幅のいいハンガリー人の隣人に会いました。その人は「シア」と言って私に挨拶をしてくれました。私は挨拶してもらったのが嬉しくて、何とかこの喜びを伝えたいと、簡単な「シア」でなく、難しい「ヨーナポットキヴァーノク」と言ってにこやかに応えたのでした。ところが一緒にいた友人にたしなめられてしまいました。向こうが「シア」と言って親近感を表してくれているのに、こちらが「ヨーナポットキヴァーノク」と丁寧に挨拶すると、相手を遠ざけているように取られるから、「シア」と言われたら「シア」と応えないといつまでたっても親しくなれないし、かえって失礼に当たると言われたのです。あんまり頑張らないほうがいいのだなあと思ったものでした。



ブダペストを西岸のブダと、東岸のペストに分けて流れるドナウ川。後方に見えるのは、ペスト側の建物。



ハンガリー語はこんなことば

ヨーロッパのど真ん中に位置するハンガリーは、周囲を七つの海ならぬ、国々に囲まれた内陸国です。ところがことばだけをとってみるとまったくの陸の孤島といえます。ヨーロッパで話されているさまざまなことばとまったく似ても似つかない孤立したことばなのです。

ハンガリーの周辺で話されていることばはラテン系のルーマニア語、スラヴ系のスロヴァキア語・セルビア語・クロアチア語、ゲルマン系のドイツ語で、これらはすべてインド・ヨーロッパ語族に属しています。これに対し、ハンガリー語が属しているのはウラル語族で、その親戚にあたるといわれるフィンランド語・エストニア語さえからもかなりかけ離れたことばなのです。

欧米の人たちに言わせると、ハンガリー語は世界中でもっとも難しいことばの一つだそうです。ほとんどの語彙がヨーロッパのどのことばからも類推できないし、目的語の種類によってすべての動詞の活用がまず2通りに分かれるうえ、それぞれの変化が何十とあり、動詞だけでなく、すべてのことばが人称によって変化し、さらに、接頭辞・接尾辞の意味や使い方、語順はもはや説明不可能、とその困難さは挙げるときりがありません。英語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語と平気で何か国語も話せるヨーロッパ人にとっても、ハンガリー語はちょっと別格のようです。

ところが、日本語とはほんの少しですが似ている点があります。たとえば名前が姓・名の順序ですし、助詞がことばの後ろにつきまします。また、ハンガリー語の発音も日本人には有利なようです。ハンガリーに行って、ほんの一言ハンガリー語を話すだけで、ハンガリー人はもとより他の欧米人も感嘆してくれます。こんな難しいことばが話せるのか!と。その理由の一つはハンガリー語の語彙は、日本語と同じくたいいの場合、子音の後には母音が来るような(CV)組み合わせになっているので、日本人にとって発音しやすいからでしょう。

ハンガリー語の世界をのぞく

ハンガリーの首都ブダペストは世界でも有数の美しい街です。ブダペスト(ハンガリー語の発音はブダペシュト)のほぼ真ん中をドナウ川が南北に流れ、西岸の丘陵地帯ブダと東側に広がる平野部ペストを個性豊かな美しい橋がつないでいます。

ハンガリー人はこの美しい首都が自慢です。確かに地形的な変化に富み、建築も凝ったものが多く、とても趣のある都市です。ちょっと見上げると建物の上に人が立って並んでいたり、時には寝そべっていたり、窓から半身乗り出して通りを眺めたりしているのです。もちろん彫像ですが。それを見て歩くだけでも十分楽しむことができます。

でも、上ばかり見て歩いているとひどい目に遭います。グニューと軟らかいものを踏みつけることがあります。眺めはいいのだけれど、妙な匂い! そうです、ハンガリー人は愛犬家が多いのです。街の歩道でもこんな具合ですから、公園の草むらなどは特に要注意! ちなみに、飼い主が持参のビニール袋に入れて持ち帰るのは、あまり見かけません。

(中央)ハンガリーの詩人、ウルシ・マーティーの像。観光名所のパーチ通りの始点となるマーティー広場にある。(右)ハンガリー人の飼う犬は、写真のような小型犬から、コリーやシェパードなどの大型犬まで実にさまざまだ。

●著者おすすめの本

『エクспレス・ハンガリー語』早稲田みか、白水社、1996。手早く勉強したい人のために。
 『ハンガリー語の入門(CD付き)』早稲田みか、白水社、2001。ハンガリー語学習書の最新版。非常に分かりやすく、勉強しやすいと評判。『エクспレス・ハンガリー語』より上級の学習者を対象にし、説明も丁寧。腰を落ち着けてやりたい人のために。
 『ハンガリー語基礎1500語』岩崎悦子、大学書林、1984。辞書代わりに。
 『図説ブダペスト都市物語』早稲田みか/チョマ・ゲルゲイ、河出書房新社、2001。豊富な写真でブダペストの歴史、文化、音楽等々を紹介。
 『彗星物語』宮本輝、文藝春秋、1998。著者が『ドナウの旅人』執筆のため1983年ブダペストへ取材旅行に行った際、通訳として知り合ったハンガリー人の青年が著者の計らいで日本留学を果たした。この青年(現、在日ハンガリー大使セルダハイ氏)が著者の家で生活した3年間の経緯をユーモラスに描いた小説。

●ハンガリー語講座および関係資料の入手先

大学書林国際語学アカデミー(語学講座)
 所在地:東京都千代田区六番町9番地AMビル
 電話:03-3264-2132 <http://www.dila.co.jp/>
 ハンガリー政府観光局(観光情報)
 所在地:東京都港区西麻布4-16-13 28森ビル11階
 電話:03-3499-4953 <http://www2.gol.com/users/htbtokyo/index2.htm>
 HUNGARY TODAY(生活や趣味の情報、リンク集)
<http://www.hunjap.com/>
 Magyar Information(ホームページで学ぶハンガリー語講座)
<http://www.hungarian-language.com/>
 ネーブサバチャグ(ハンガリー語の新聞)
<http://www.mti.hu/>

見る聞く考えるやってみる授業——⑮



作ることで知る・メディア・リテラシー

～現代文「情報社会と人間」の実践～

春日丘中学・高等学校教諭 清水宣隆

あらゆるメディアから膨大な量の情報が流されている現代の情報社会で生きていくために、情報そのものやそれを伝えるメディアについての読み解きをする能力として、「メディア・リテラシー」ということが語られるようになってきている。メディアの意味や構造を読み解き、メディアによって自らを表現することによって、新しいコミュニケーションを切り開いていく能力のことをいうのである。

この実践は、テレビ・メディアを使って生徒に番組を制作させることで、私たちが受け取っている情報について考えさせるメディア・リテラシーの取り組みである。

この実践では、まず情報に関するいくつかの文章(岩崎武雄『情報時

代の落とし穴』、水野博介『映像メディアと言語メディア』、黒崎政男『速度礼賛から時の成熟へ』、西垣通『携帯電話考』)を読み、情報社会の持つ問題点を概観する。その後、ビデオカメラを使い、4～7人のグループ単位で3分程度のインタビュー番組を制作する。取材、撮影、編集まで生徒たち自身で行う。そして、できあがったものを見て、議論する。

テレビから多大な影響を受けている高校生たちは、この活動に喜んで取り組む。日頃は見ている側にいるテレビを、作り手の側から体験する。そして、番組の制作過程でさまざまなことに気づいていく。番組といっても、ここでできるのは授業中に教師や友だちにインタビューしたものを、切り取り、つなぐ程度の作品である。しか

授業例

科目:現代文 単元「情報社会と人間」

対象:高校2年・文系クラス34名

この時間までに、生徒たちはグループに分かれて、それぞれ次のようなテーマの短いインタビュー番組を取材、撮影、編集し、視聴している。

- Aグループ「モーニング娘。についてどう思うか」
- Bグループ「思い出の曲は何ですか」
- Cグループ「正当防衛はどこまでか」
- Dグループ「異性のどこに関心がある？」
- Eグループ「携帯電話を学校に持ってくる必要性」
- Fグループ「男女の好みについて あなたはどの顔が好き？」
- Gグループ「開かれた学校と閉じた学校とは～大阪池田小事件^{★注}から～」

できあがった番組を見て、

①「この番組を実際に放送するとしたら、どんな問題があるか」

②「これだけ編集したり構成したのに、制作した番組は事実といえるのか」という問いかけ、議論をする。

①での主な意見

「取材した私たちにはわかるが、見ているだけの人にはわからない部分が多くある」

「インタビューした人たちに、放送することを伝えていない。了承を得ていない」

②での主な意見

「私たちは意図をもって構成したが、悪意があってやったわけではない。これは演出といえるのではないか」

「どこまでが演出でどこからがやらせなのか」

生徒たちは、メディアからの情報はありのままを伝えているわけではなく、制作者によって構成されたものであり、私たちはそんな情報にさらされて、その情報をもとに判断していかなくてはならないことに気づいていった。

★注:2001年6月、大阪府池田市で児童8名が死亡、教師を含む15名が重軽傷を負った大阪教育大付属池田小学校での殺傷事件。



し、それでも情報に変わりはない。番組を作るには、企画段階で何を伝えるかという制作意図が必要となる。インタビューでは、その意図を組み込んだ問いかけが必要であり、またすべての映像やコメントを取り入れることができないため、編集の段階でどうしようかと悩むことになる。結局、番組にするには意図をもって切り取り、並べ替えるなどして構成するしかない。しかし、その構成が面白さを生み出すことにもなる。番組作りをすると、こういったことが経験的に理解できるのである。

メディア・リテラシーのメディアとは、テレビやラジオ、新聞といったマス・メディアだけのことではない。ことば、文章、映像など、我々が

何かを伝えるときの媒介となるものはすべてメディアであると捉える。

メディアを使って表現されたものは、すべて構成されている。何かを書いて伝えるときには、どんなことばを選ぶか、どんな順番で伝えるかを考えざるを得ない。メディア・リテラシーは、こういった普段の我々のコミュニケーションの営みを意識させるものである。生徒たちに番組を制作させることで、情報というものを相対的に見る視点を獲得させ、何かを伝えるという行為はどんなものであるかを発見させたい。このいわばコミュニケーションのベースとなる部分を理解しているかどうかは、他者が表現したものを読み解いていたり、自ら表現していくときに影響を与えるに違いない。

生徒のまとめから

生徒1●今回の授業を通して私は、結論をあらかじめ予測してしまっている自分に気がついた。何人もの人にインタビューをしているうちに、傾向みたいなのが見えてきて、結論につなげるために、編集する時点でその予測した結論とは相異なる意見を削除してしまっていたのだ。本来、結論とはインタビューをすべて終えた後に浮かび上がってくるものであり、途中で決めつけてしまうべきではない。このように、正しいとはいえない結論を出してしまったものを、メディアを通して一般の人に見せるならば、間違った情報を提供していることになる。この間違った情報を民間の人々は信用し、時にはそのインタビューに参加した人の人格まで誤解されてしまうことがある。

現在は、情報があまりにも重要視されすぎていて、人々はそれに頼りすぎてしまっているのではないだろうか。情報はとつともなく高速に広がり、そしてすぐにまた新しい情報がやってくる。情報は確かになくはならないものであるが、情報に依存しすぎてしまっているのは、現実が見えなくなってしまうだろう。自分の意見をきちんと持ちながら情報と接し、情報を信用しすぎないことが必要であると思う。情報を信用しすぎていると、そのうちに人を傷つけかねないし、また傷つけられかねないかもしれない。大切なのは、自分の意見と情報を参考にし、現実を見極めることである。

生徒2●「本当に、今は事実なんだろうか」。あなたは、こんな視点で一つの情報を見つめたことがあるだろうか。例えばテレビの報道番組。私を含め多くの人は普通、そこから得られる情報をすべて事実だと思い、鵜呑みにしている。しかし、実際はどうだろうか。

今回の番組制作で私は、こんなことを感じた。「事実は時の経過によって変わるのではないか」ということだ。実際、傷害事件だと思われていた事件が、実は被害者による狂言であったということが最近でも起きたばかりだ。このときも、私たちははじめ「傷害事件」ということで報道されたこの「事実」をそのまま受けとめた。しかし、時が経ち、次は「狂言」というまた新しい「事実」が報道された。つまり、「事実」はいくつも存在し、状況によって変わらうものなのだ。だから私たちに疑う目も必要である。

次に私は、「制作者の意図することは必ずしも視聴者にそのまま届くとは限らない」ことにも気がついた。私たちの番組は、より正確に内容をつかんでもらうために、要点だけを取り出した短いものとなった。しかしその意図は逆に「単調」という視聴者の意見に変わってしまった。私たちも制作者の意図がわかっていないかも知れない。

私たちは情報から逃げられない。情報を事実と取るか否かは、視聴者である私たちにかかっている。

TJFの事業

「第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト」 入賞作品決定

TJFが毎年開催している「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」は、今回5回目を迎えました。このコンテストは、日本の高校生が何を考え、どんな生活を送っているのかを、高校生自身が写した5枚の写真と文章で、海外の同世代の若者に伝えてもらおうとの趣旨で行われています。

今回は過去最高の497作品(写真2,485枚)が寄せられました。その内訳は、美術、英会話、韓国語、産業社会と人間など、授業の一環として制作した作品が349作品(70%)、写真部や美術部などの部活動の一環として制作した作品が133作品(27%)、個人制作が15作品(3%)でした。今回は特に、TJFからの呼びかけに応えた、授業を通じての制作が増えています。現像代やプリント代などの費

用がかさむこと、教師が写真の専門家ではないため撮影の技術指導が難しいなどの課題はありますが、現場の教師からは、「コンテストの作品制作は生徒が自分のアイデンティティを考える良い機会となった」「写真を撮る過程で生徒同士に発見があった」「コンテストに入賞して認知されたことが生徒の励みとなった」などと、教室で作品づくりに取り組んだ意義について報告が届いています。

1月29日に開いた審査会において、最優秀賞(秋田県立横手高等学校佐藤里美さんの「笑顔満点、元気じろのなっちゃん」)をはじめ、入賞作品17点を決定しました。佐藤さんは、「見ている人の口元を自然とほころばせてしまう」主人公の伊藤さんから「心から笑うことの楽しさを教えてもらい」、その魅力ある笑顔を書し出しました。審査委員長の田沼武能氏は、「一生懸命作品づくりに取り組んでいる人は、写真を撮りながら主人公に魅力を感じ、どんどん新たなことを発見しており、そうすると写真が発展していき、写真を見る第三者にも主人公のよさが伝わるようになります。このような作品が上位に入賞しています。現代の日本に生きる高校生の、平凡でも様々な姿を写し出すことが一番大切ではないかと思ひながら、審査をさせて頂きました」と講評しました。また、審査員の米田伸次氏から、「今回のメッセージには、夢を持ち実現しようとしている友達の姿に『輝き』を見出し、その姿から勇気づけられたというメッセージが多くありました。写真を撮ることを通して他者の中に新しい人間を発見し、さらに自分自身をも見つめ直し、他者と豊かにつながっていく、このプロセスが大切なのです」とのコメントを頂きました。

2月23日、上位入賞者6名を招待し東京・三軒茶屋にて授賞式と懇親会を行いました。賞状と盾を授与した後、撮影者や主人公に自分の作品を紹介してもらう時間を設け、作品のねらいや制作中のエピソードを語ってもらいました。また授賞式会場では入賞作品17点の展示も行いました。

入賞作品はTJFのホームページ(<http://www.tjf.or.jp/>)にてご覧いただけます。また、入賞作品を中心に応募作品をまとめた写真集『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 2001』を6月末に発行し、国内関係者のほかアメリカ、オーストラリア、中国など海外の中高校で日本語や日本について学ぶ同世代に知ってもらうため、関係機



(上) 審査会の様子。撮影：中村尚暁

(下) 授賞式で入賞者の記念撮影。撮影：北郷仁

関に寄贈する予定です。なお、本コンテストの作品展が、本年3月まで英国で開催された大型日本文化紹介事業「Japan 2001」の一環として、現地の公益法人JFET(Japan Festival Education Trust)の主催で英国各地の中学・高校等で開催され、合計約10万人の来場者

がありました。JFETでは日本の高校生の写真とメッセージに応じて、英国の若者からの写真とメッセージを募集する「The Way We Are(UK)」という英国版コンテストを実施し、去る2月に授賞式を行うなど、海外からの反響も届いています。

(辻本京子)

最優秀賞「笑顔満点、元気じろしのなっちゃん」

佐藤里美(秋田県立横手高等学校)



1



2



3



4



5

- 1 やつとこのことで作品が完成し、大喜ぶするなっちゃん。「もう、やだっ」と言って筆を投げてしまった日も多く……。そのため出来あがったときは、教室中を走るわ、スキップするわのお祭り騒ぎ。
- 2 セルフタイマーでクラスのみんなとの一枚。わたし(撮影者)が一番右下に滑りこみセーフ。みんな「なっちゃんに集合!」と、押すな、押すなの大騒動となりました。
- 3 床屋さんを経営しているおばあちゃんのお手伝いにはげむなっちゃん。おばあちゃんとなっちゃんのコンビは、いつも爆笑の渦を巻き起こす!
- 4 まるで「だんご三〇〇」のようになりながら、仲むつまじく髪結い……。はずが、「姉ちゃん、痛い!」の一言に反撃にでたなっちゃん。そんな2人をやさしく見守りつつもなだめ役のお母さん。
- 5 なっちゃんを土俵ぎわに追いこんでいるのは、柔道部の妹あやかちゃん。「毎日こうなの?」と聞くと、「姉も楽しじゃないのよ」と……。でも本当に楽しんでいるのはなっちゃんの方だったり……。

※佐藤さんのプロフィールとメッセージは「素顔の高校生」(p.16)に掲載されています。

主人公

伊藤夏湖(16歳)

■ 趣味

読書、散歩

■ 尊敬する人

ミハエル・エンデ、江國香織

■ 好きなことば

ボレ・ボレ(マサイ族のことばで「ゆっくり ゆっくり」の意味)

■ 大切なもの

友達、日記帳、本

■ メッセージ

ついにオーストラリアで暮らすことが決まりました。高校に入って、せっかくたくさん友達できたのに、会えなくなるのは残念だな……。美術室でただおしゃべりして過ごしたり、お天気のいい日、みんなで裏山を散歩したりできなくなるなんて。まだ信じられなくて、ちょっと変な感じがする。学校から帰ってくると「おかえり。お茶っご飲め」って言ってくれるばあちゃんとも、少しの間、お別れか。なんかセンチな気分です。でも、英語を勉強できるのは、とてもうれしい。外国の本を原書で読むのは、小学校の頃からの夢だったから。その国のことばだからこそおもしろい本って、あると思う。どの国のことばも、それぞれ美しく素晴らしい。私は、いろいろなことばの性格をつぶさないで使える人を尊敬するし、そういう人になりたい。3年間でいるんなこと吸収してくるよ。

第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト入賞作品

■ 最優秀賞(1作品)

「笑顔満点、元気じろしのなっちゃん」 佐藤里美(秋田県立横手高等学校)

■ 優秀賞(2作品)

「一生懸命頑張るファイターりさ」 石川直子(沖縄県立真和志高等学校) / 「imagine」 五味稚子(目白学園高等学校[東京都])

■ 審査員特別賞(3作品)

「SMILING EVERYDAY～等身大の18歳～」 後尾久美子(大阪府立大手前高等学校定時制課程) / 「いつも明るく明朗に振舞っている大中さん」 園田忠司(市川高等学校[兵庫県]) / 「忍ちゃんの生活」 今佳奈子(山形県立霞城学園高等学校通信制課程)

■ 奨励賞(11作品)

「輝く先輩のように」 古西由季(岐阜県立大垣工業高等学校) / 「18歳～彼女の学校生活～」 森田雅之(熊本県立熊本農業高等学校) / 「裕貴ちゃん17歳」 山本佳奈(三重県立上野高等学校) / 「『そばにいてくれる』存在～754枚からの発見～」 中才知弥(大阪府立大手前高等学校定時制課程) / 「伸吾君元気がいっぱい～17才の青春～」 新井喜信(岐阜県立土岐北高等学校) / 「ドレッドくん」 伊藤菜々子(大阪市立工芸高等学校) / 「なぎなた部キャプテンの素顔」 平田詩織(広島県立庄原格致高等学校) / 「いつものさとしくん」 堀尾忠司(岐阜県立土岐商業高等学校) / 「あなたの笑顔がステキ!」 奥山佳美(三浦高等学校[神奈川県]) / 「素顔」 石崎翔子(和光高等学校[東京都]) / 「等身大の泉」 佐藤晴歌(岩手県立千厩高等学校)

「であい」ホームページ毎月更新中!

<http://www.tjf.or.jp/deai/>

「であい」ホームページは3月に正式にオープンし、キットを補足するさまざまなデジタル情報を発信しています。「であい」キットは2002年3月から本格的に配付を始めましたが、実物を手にした先生方は、具体的に自分のクラスに合った使いかたを考え始めているころでしょう。3月からの配付にあわせて、「であい」ホームページの内容も充実させています。「であい」を使った日本語

の授業案を大幅に追加、写真シートに写っている事物やキャプションを補足する「ミニ事典」を公開したり、学校パンフレットなどの「参考資料集」を充実させたりしてきました。今後も、先生方のアイデアや意見を糧にますます“成長”していきます。「であい」ホームページに関するご意見をお寄せください!

→ deai@tjf.or.jp

(地挽里麻)

主な更新内容

教師のためのサポート情報

■ 授業計画と授業案

TJFが提案する授業案: 日英10テーマ

日本語教科書と「であい」を併用した授業案:

- Ima!* *Ima!* 2 に沿った授業案
- Kisetsu* 「春一番」と「であい」の併用についてのエッセイ
- Mirai* *Mirai* Stage 5 に沿った授業。自動販売機ゲームにチャレンジ!
- Obentoo* *Obentoo* 1 に沿った授業案
- Wakatta!* Unit 1, 3 に沿った授業案

各国の日本語教師による授業案: 米国、豪州、日本の日本語教師10名の授業案

■ 参考資料集

主な内容

- 教育: 山本隆幸の学校パンフレット、生徒手帳など
- 食: 7人の高校生の食に関する考え、日本人の和食や米についての意識調査など
- 社会環境: 北海道の動物、世界遺産、大気汚染など、7人と関係深い地域の社会問題に関するホームページ

■ ミニ事典

食、住、教育、余暇、年中行事、社会環境などのテーマに沿って、約240項目。関連のある写真シートとリンク。



授業案



参考資料集



ミニ事典

写真・マイストーリー・メッセージビデオ

CD-ROM1に収録された7人の高校生の写真1,116枚が、検索可能なかたちで掲載されています。さらに3、4月の更新では「であい」ブックレットの中からマイストーリーをPDF形式にして掲載したほか、7人のメッセージビデオも載せました。ビデオについては、ホームページ用にファイルサイズを軽くしたものを掲載しています。CD-ROM2に載っているビデオや歌は、準備が出来次第、順次公開していく予定です。



写真・マイストーリー・メッセージビデオ

2001年度第2回通常理事会・評議員会報告

- **日時:** 2002年3月12日(火) 10:30~12:00
- **議題:**
- ① 2001年度事業概況中間報告および収支予算の一部変更について
 - ② 2002年度の事業計画案とその収支予算案の承認について
 - ③ 評議員1名交代の件

野間佐和子会長の議事進行により3件の議題が審議され、いずれも承認されました。報告と提案は常務理事の田所宏之によって行われ、全体におよそ次の通りでした。

①においては特に日本の高校生の日常生活写真教材「であい」の完成が報告されました。「であい」のキットの実物が理事・評議員に披露され、開発時の実情が具体的に報告されたうえ、すでに米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、英国などの日本語教育機関に寄贈の手続きが開始されていることが伝えられました。そのほか中国における日本語教師研修会用教材の出版準備がまもなく完了することなど、継続中の各プログラムの実施状況などが細かく述べられました。また収入の面では出捐企業の各社に特別賛助会費の拠出をお願いし、協力を得られた旨の報告もなされました。

②については、今回は特に弊財団の設立15周年に当たる2002年事業の運営に期待が寄せられました。完成したばかりの「であい」教

材に関しては、教育現場での活用の実践事例を収集することが大きなテーマとなります。

一方、中国との関連では、日本の高校で中国語教育を実践している教師の研修会がハルビンで行われる機会をうけて、中国の日本語教師研修会もハルビンに一本化し、両国教師同士の交流が積極的に行われるよう15周年記念事業の一つとしてプログラムが組まれることとなります。

日本の高校における韓国朝鮮語教育についても注目すべきプロジェクトを実施します。過去に行った状況調査をさらに発展させ、高校での広範な調査に加え、大学の実情をも調べて両者の連携を目指し、隣国の言語学習をすこしでも興隆させるよう図ります。

③は評議員林隆夫氏が退任し、(株)トーハン海外事業部長小宮秀之氏が就任しました。

創立15年を迎える2002年には、これまで継続して参りましたそれぞれの事業が少しずつ具体的な形を整えてきて、かなり明確な姿を確認できるようになってきたのではないかと思います。つまりそれぞれの事業が成熟期に入っていることを感じさせます。これはとりもなおさず、現在が弊財団にとって大変大切な時期にあることを意味しています。今後の財団の歩みをお見守りください、これまでも増してご教示ご支援をなにとぞ宜しく願います。

(高崎孝)

事業報告(2002年1・2・3月)

- * 第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト審査会開催(1月)
- * 中国初等中等教育における日本語教育事情調査(~2002年3月)
- * 中国日本語教科書編集協力(継続)
- * 高校中国語教科書編集協力(継続)
- * 「であい」キットの寄贈
- * Japan 2001写真展・コンテスト開催協力(~2002年3月、英国)
- * 『国際文化フォーラム通信』第53号発行(1月)
- * 『小溪』No. 12発行(1月)
- * 『ひだまり』第10号発行(1月)
- * 第5回高校生の生活フォトメッセージコンテスト授賞式開催(2月)
- * 「であい」関連セッション・ワークショップ開催(2月、英国)
- * 第26回中国語教育研究会助成(2月)
- * The Japan Forum Newsletter No. 24発行(3月)
- * 第2回北陸地区高校生中国語発表会後援(3月)
- * 帝塚山学院大学国際理解研究所主催第26回国際理解教育賞助成(3月)

素顔の高校生——①

笑えることって すごく幸せなことなんだよ。

佐藤里美 (秋田県立横手高等学校)

今、私が住んでいるところは、周り中が山と畑と田んぼの広がる田舎です。80軒くらいの町内で、回覧板などを持っていくと、お茶を飲んでいけとか、ご飯を食べていけと言われ、まるで大きな家族のようです。高校は横手の町中にあり、電車と自転車と徒歩で1時間以上かかります。

小学校のときは足が速かったので運動系に進みたいと思い、中学では吹奏楽部に入っていたのですが、高校では写真部と美術部に所属しています。もともと絵をかくのが好きだったことと、美術と似ているところがある写真もやってみようと思って入りました。先生から基本的なことや「日常のすべてをカメラの視線で見なさい」ということを教わりました。

主人公のなっちゃんは、そばにいただけで幸せになるような不思議な人です。正直に言うと、私ははじめ彼女は異常だと思いました。だって、いつも笑っているからです。彼女の笑顔は見ている人の口元を自然とほころばせて

しまう。そんな不思議な力があるのです。なっちゃんは私に「笑えることってすごく幸せなことなんだよ。楽しいから笑うのじゃなくて、笑うから楽しいんだよ」ということを教えてくれました。

なっちゃんを撮ったのは彼女のオーストラリア行きが決まった去年の秋からで、3カ月くらいの短い期間でした。学校ではいつもえへへと笑っているなっちゃんが、家ではすっかりお姉さんぶりを発揮していました。床屋さんのお手伝いをしているときも接客が上手で、こんなに大人っぽいなっちゃんがいたのかと驚きました。

近頃、なっちゃんの家に行くと段ボール箱に荷物が詰めてあって、いよいよなんだなあと思う。でもなっちゃんは今、英会話を一生懸命勉強しています。将来、翻訳家になりたいという目標があるから、なっちゃんにとってはすごいチャンスだ。もし夏休みにオーストラリアに行ったら、なっちゃんの新しい生活ぶりを撮りたいです。

インタビュー・構成: 吉田忠正

TJFが主催する「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」の参加者にお話をうかがい、いつの間にか私たちの間に定着してしまった“今どきの高校生”のイメージを変えてくれる、ちょっとイイ話を毎月お届けします。



撮影: 北郷仁

佐藤里美(さとう・さとみ)さんのプロフィール

秋田県平鹿郡増田町に生まれる。16歳。好きな教科は倫理。趣味は映画鑑賞。好きな音楽はクラシックといやし系のエンヤの曲。大切にしているのは家族と友人。今熱中しているのは料理を作ること。将来は自分でかせいだ給料で両親を海外旅行に連れて行きたい。そして結婚して地元で暮らしたい。ニーチェの「神は死んだ」という言葉を聞いたとき、これまで甘えて生きてきた自分が鞭打たれたように感じた。

編集後記

1987年6月22日、講談社を中心とする出版関連企業の出捐によって誕生した民間財団であるTJFは、今年15周年を迎える。私自身は正式職員となってからちょうど10年になるが、90年代の国際文化交流の転換期のなかでTJFの事業の舵取りに参加できたことを幸せに思う。事業のキーワードは、設立当初の「日本語・日本文化」「草の根国際交流」から「ことばと文化」「教育」へと軸足を移してきた。とりわけこの10年の前半期は事業の足固めをしながら焦点を絞り込んでいったが、後半は迷うことなく具体的な行動計画を実施に移してきたように思う。現在のTJFを支える職員は皆この時期を共に歩んできた人たちである。

「文化交流は人に始まり人に終わる」という名言と出会ったのは、もう遠い昔のことであるが、昨今新たな感慨をもってこのことばを受けとめている。文化や教育を扱うとき、得てしてマクロの視点に立って物事を考えがちになるが、個人と個人の対話を何よりも大切にした事業の組み立てを考えていくと、人と人をつなぐこと、その人たちが互いに対話できる場を作り、互いの違いを認め合いながら共有価値を探っていくことがいかに大切かがわかってくる。そうしてできたネットワークが個人を支え、個人がネットワークを動かして一人

ではできなかったことを実現させていく。こうしたネットワークを継続的に国境を超えて丁寧に紡いでいくことが私たちの仕事ではないかと思う。今年度の通信では、TJFが引き続き紡いでいこうとしているネットワークを検証する特集を組む予定である。

本号は高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク設立前後における一人ひとりの教師の思いと、運動としてのネットワークとの相互作用を取り上げた。55号では日本の高校生からのフォトメッセージを受け取った海外の高校生たちからのフィードバックを紹介する。学校の外にある民間財団という第三機関が、日本の国際理解教育と海外の日本語教育をつなぎながら、高校生たちに発信の場を提供していくことの意味を問う。56号では長年エールを送ってきた中国の中高校の日本語教師たちと日本の高校の中国語教師たちとの交流の軌跡から、互いの言語を教える教師たちが共有している価値を探る。57号では新しく制作した写真教材「であい」で日本語を学んだ海外の高校生たちが、「であい」の主人公とどんな対話をしているのかを取材する。こうしたネットワークの主役たちから、20周年いやもっと先を見据えた事業のあり方を学んでいきたい。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
(TJF)



国際文化フォーラム通信54号
2002年4月発行

発行人 高崎孝

編集人 中野佳代子

デザイン・DTPオペレーション 財団法人国際文化フォーラム

フォーマット設定 鈴木一誌

出力・印刷・製本 近代美術(株)

校閲(有)天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1
新宿第一生命ビル26階
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215
E-mail: forum@tjf.or.jp
http://www.tjf.or.jp/